

---

# 夢追兎。

葵介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢追兎。

### 【Zコード】

Z0660D

### 【作者名】

葵介

### 【あらすじ】

最愛の彼女を失くした“僕”冷たく冷え切った心。行き先を見失つた自分の方位磁石。生きる理由を失くした“僕”の目の前に突如不思議な男が現れる。『少年の前世は兎だね』切なくも、温かい短編小説。

雨粒を含んだ灰色の雲が、ゆっくりと墓地の上を横切った。

先日立てられたばかりの真新しい十字架の前に、僕は立ちすくむ。この土の下の棺の中に、僕の最愛の彼女　凛は眠っているのだ。

彼女はもういない。この世に、僕の隣に。

あの笑顔も、優しさも、小さな掌も残されてはいない。

寂しいだとか、人肌が恋しいだとか、そんなレベルじゃない。

心の底が冷たい。凛を失つていらい、自分の方位磁石が狂つてしまつた。

生きる理由を失くしてしまつた。

どんよりとした空を仰いでは、ため息をつく。はちきれんばかりの悲しみも、苦しみも、なぜだか涙になつて溢れてはこなかつた。

そう言えれば昔、ため息をついたら幸せが逃げるよ、つて彼女にたしなめられたつけ。

目をつぶれば　。ほら　。

こんなにも鮮明に凛が蘇る　。

カメラよりも鮮やかに、動画よりもなめらかに　。

『唯斗の手つていつも冷たいよねー』

『ナハヘ..』

冷たいと言いつつも、ぎゅっと僕の手を握りしめてくれる凛。  
真冬の夕暮れ、空が薄紫色からやがては漆黒の黒へと変わる頃。  
僕達は学校帰りにいつも立ち寄る小川のほとりで、談笑にふけっていた。

『凛の手はいつも温かいよね』

『唯斗の手が冷たすぎるのよ』

僕の手の何倍も細い君の手。

ぐっと力を入れればすぐに折れてしまいそう。

こんなにもか弱そうな手だけれど、カイロのよつよつ温かい。  
冷え込むからか、ただ愛おしいからなのか、気がつけばその小さな  
掌をぎゅっと握りしめていた。

『僕の手が冷たいのは、心が温かいからだつて』

『なによ、それ』

じゃあ私の心は冷たいってこうの、と途端にふくれつづくする僕は口角を一イを上げて笑つてみせた。

『だつて冷たいじゃん』

『酷い！ やんなといひつ争うのやつ……』

『だかひひな』

僕が凛の心はずつと温めてあげる

『……え？』

『その変わり、僕の冷たい手は凛がずつと温めてよくな

そこで言葉を切つて、再び一イと勝ち誇ったように笑つてみせた。得意げな表情の反面、声が上がらないでよかつたと、ほつと胸をなでおひおひ僕。

彼女は目を見開き、そしてひみつと瞳を潤ませた。

『それって……プロポーズじゃん』

『かもね』

僕の手が冷たいのは彼女に温めてもらつため。  
運命なんて信じるタチじゃないけれど

君に出逢えたこと

これはまぎれもない運命だつた

なのに  
なのに

思考は引き戻され、無機質な十字架が所狭しと立ち並ぶ墓地が再び  
目に入つてきた。

どれくらいの間、立ち戻りしただらう?  
足がじんじんと痺れても、僕はここから離れようとはしなかつ  
た。

飽きることなく十字架を見つめる。

彼女が生き返つてくれると心のどこかで信じてゐる僕がいて。  
ふがいなくて。

悲しくて。

泣き叫びたいのに、涙が出てこない。

「本当に悲しこきつて、涙が出ないんだね」

誰に言つわけでもなくポツリと呟く。

やがて雨粒を支えきれなくなつた雲から、ぽつりぽつりと雨が落ちてきた。

冷たい雨が僕の体温と、心を奪つていいく。

洋服に雨が染みこんで、そのまま僕の体内に入つていて、何もかもを感じなくさせてくれたらどんなにいいか。

もつ帰らつゝと墓地から背を向けようとした瞬間

後ろで軽やかな声が響いた

「少年の前世はきっと兎だね」

後ろを振り向くと、そこには妙な格好をした長身の男が立つていた。青白い肌に、銀色の髪、にたりと笑つた口からのぞく鋭い八重歯。真っ黒なマントを羽織り、道化師のような先のとがつた長靴。今にも踊りだしそうな晴れやかな顔に妙にいらついた僕は、何の用ですか  
とぶつかりぽつて答えた。

「そんなに怒らないでよ。ただ、君の前世が兎だって気づいただけ  
だ」

「……兎？」

兎だといわれても、ピンとこない。

戸惑う僕を見て、男は案の定かすかな笑みを浮かべた。

「愛する人を失した途端、寂しくて寂しくて死んでしまう哀れな兎  
だ」

まさに今の僕だ。

愛する人を失くした途端、生きる意味をなくして。  
自分の足が動かなくなつて。  
何もかもがモノクロに見える。

そのくらい

凛と過ごした時間は

色濃く僕の心の中には存在しているんだ。

「そうですね。僕は……彼女がないと生きていけない

何を言われても動じない。

男の言葉を聞いたところで、凛が生き返るわけではないから。

今は誰とも話したくないといわんばかりに、きびすを返して立ち去

れりとした。

僕の背中に呼びかけるように、でも、と男が続ける。

「兎は愛する人のことは一生忘れない。

愛する人の想いと共に、夢に向かつて野を駆けることができんだ」

君はなれるかい？

夢追兎に

？

その言葉と共に、男はぐるりと背を向け鼻歌を歌いながら陽気に消えていった。

「夢追兎……つか」

墓地に再び身体を向け、そつと立てられた墓に手をそえる。

彼女の名が刻まれたところを、繰り返し感じ取るようになぞつていく。

彼女は死んだ。戻つてはこない。  
寂しい。苦しい。

けれども「人の想いは、夢は、変わりはしない。

『私の夢、なんだか知りたい?』

『うん』

僕のプロポーズの後、彼女はきらきらと皿を輝かせていつ言った。

唯斗の隣にずっと一緒にいること

「凛……」

“兎は愛する人のことを決して忘れない”

“愛する人の思いと共に、夢に向かつて野を走ることができるんだ”

男の言葉が、一つ一つ心へと染み込んでいく。  
冷たく冷え切った心に、温かい雫が落ちてきたような感覚に陥った。  
涙を忘れていた目から、一滴の雫がぽとりと雨に混じって落ちていく。

「忘れ……なーいっ」

忘れるもんか。

「君の」と……うつ、忘れやしないよ

こつまでも

「君は僕の中へこむ……っ、からね」

こつまでも

「……こじてるっ……」

永遠に、愛してる。

僕は君と共に夢を追う兎なんだ。

(後書き)

こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！  
まだまだ未熟者ですが、これから頑張っていきたいと思いますので  
よろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0660d/>

---

夢追兎。

2010年12月2日01時38分発行